

はじめに

秋道智彌

(総合地球環境学研究所)

平成16年度の報告書が完成した。当然かも知れないが、前年度よりも格段、ふくらんだ内容になっている。中国、ラオス、タイでの調査も協定を踏まえて2年目になったからだ。調査だけでなく、相手機関との研究集会やシンポジウムも活発におこなわれた。中国では雲南大学との第2回ワークショップ、ラオスでは森林農業班、平地班、人類生態班、モノと情報班が独自の研究集会をもった。米国や英国での学会発表もおこなわれた。

こうした班ごと、あるいは個別の研究発表や研究交流とともに、班を超えた新しい動きもでてきた。平成17年2月には昨年度に引き続く全体会議を長崎県で開催し、60名近くの班員が参加して活発な討論を繰り広げた。当番としてお世話いただいた。長崎大学の門司和彦さんほかスタッフの方々に厚くお礼を申し上げたい。今年度は平地班が世話役となって中部地方で明年1月末に開催予定である。

今年の3月上旬、外部評価委員による中間評価会が実施された。本報告書の冒頭にそのさいの議論や質疑応答を掲載した。研究代表者の力不足もあって、十分に評価委員への質疑に応じられていない面もある。プロジェクト自体に対しても「優」の評表が与えられたわけではない。この点を、プロジェクト班員各位にも真摯に受け止めていただきたい。

また3月26日には、フランスからG・コンドミナス先生をお招きして、「歴史と環境」と題するシンポジウムを開催することができた。このなかでは、コンドミナス先生の記念講演のあと、プロジェクトのメンバーが中心となって「緑の革命その後」をテーマとする討論をおこない、4名の発表のあと、3名からコメントをいただいた。その内容は読売新聞紙上でも大きく取り上げてもらった。プロジェクト全体として外部に向けておこなった最初のシンポジウムであった。

実質上、プロジェクト研究の第1フェイズは平成17年3月で終了したことになるが、すでに第2フェイズにむけてすでに大きく踏みだしている。法人に移行した前年から予算面、制度面でとまどいながらの出発であり、とくに予算面での縮小はいくつもの問題が投げかけられ、明らかにハンディとなっている面もある。しかし、これにひるんではいられない。とくに、大型予算を消化するプロジェクト研究にたいする内外の眼は厳しい。自分の研究だけをこじんまりやっているだけでは、本研究に参加する意義もないに等しい。

新しく、生態年代記の編纂やRCC、FCCなどの研究も着手されたいま、生態史の統合的な研究に向けて各自がどのような貢献をすることができるのか、プロジェクトの真価が問われる年度と位置づけたい。明年2月の上賀茂移転にともなって、地球研における研究の効率が若干、鈍化することが懸念されるが、それに抗して研究を進めるべきと考える。

本報告書出版が、当初から2ヶ月ほど遅れたことをお詫びしたい。締め切りに間に合わせていただいたかたにはとくに申し訳なくおもう。情報共有の遅れが今後プロジェクトにとって致命的にならないことを祈るばかりである